

## なでしこ、女王陛下の水兵になる！

### 第二回「イギリス王室海軍!？」

#### 海軍入隊！そしてイギリス人に

1999年、私は18歳になりました。高校時代から学校の方針により軍事訓練を受け、イギリス海軍に興味と関心を持っていたため、イギリス海軍への入隊を希望しました。よりイギリスに敬意を払いたい願いで「外国人部隊」という区分で応募をしたところ、軍より「君は、そこよりももっとコアなところにおいで」との誘いを受け、イギリス人だけで編成されているとある部隊への入隊が決まったのです。高校卒業を目前に控え、大学への進学も決まった6月の事でした。

現在でも、当時と変わらず EU 圏外からの正式入隊は異例中の異例です。

#### 熱い思い

劣等生も、この頃にはネイティブ同等の英語で話せるようになりました。学力も追いつき、大学の面接試験に合格して、イギリスのセンター試験に当たる A-Level（三教科選択制）で A-E 判定の内 ALL A を得るほどまでになりました。体力も、陸上・ラグビー・そしてグラウンドホッケーではイングランドのナショナルチームのプレーヤーとして戦えるほどに大いにある、と言う自信も付きました。

体力と気力があまり、「お国の為に、お世話になっているイギリスの為に」と18歳の多感な少女は、学生をしながら海軍へ入隊していきました。

#### 「鬼のトレーニング」



Fire engine training on the battleship.

それは7月・8月の長期休暇期間に行われ、2か月間銃の打ち方、扱い方は勿論のこと、海軍では苦手でも「水泳」の訓練にも参加しなければなりません。湖や海での小型船舶・大型船舶の掃除、炊事、行き先のチェック、船舶周りの警備訓練、空手、軍用車の運転など数多くの訓練が盛り込まれました。

水泳は、一日2kmと決まっていました。泳ぎ方はクロールか平泳ぎで、クロールの方がより体力を必要とするため、海軍

では重宝されました。これは不幸中の幸いで、平泳ぎがとにかく不得意だった私は、吐きそうになりながらもクロール2kmをこなしました。

海軍のみならず、全軍を通して体力づくりは一番重要なトレーニングになりますが、その次に重要なのは精神的な情緒育成です。情緒育成では、軍人は国民を守り、世界各国で必要な際には人道支援に携わる上で、いかにフレキシブルな心でいられるかを教わりました。

銃火器の扱いについては、集中的に訓練が行われます。入隊 2 か月で全員が所持許可免許試験に合格しなければならないノルマがありました。失格になると、そこで部隊から外されてしまいますから、受かるまで訓練と言うハードなものでした。

## 海外トレーニング

長期ならでのトレーニングが、海外トレーニングです。1999 年の夏、私は南米ボリビアとペルーの険しい山を 30 kg（体重の 1/3 程）のリュックサックを背負い、10 人編成で生活を共にしました。最後まで 10 人無事でイギリスに帰国しなくてはなりません。途中で不満や不平があつては喧嘩を繰り返したのですが、結果的には全員無事に帰国できました。その時の 10 人とは、未だに交流があります。

ペルーではマチュピチュまで登り、ボリビアではユウニ塩湖まで観光も兼ねて世界遺産を散策できたので、訓練でしたが苦しみよりも「感動」の方が多かったです。

また、南米ではイギリスよりも貧困が多くみられ、私たちは現地で 3 日ほど食料支援として「炊き出し」も行いました。料理に慣れない学生 10 人ではありましたが、現地住民の皆さんたちから笑顔を頂けるのは、何よりの楽しみでした。

夜にはキャンプに戻り、自分たちが作った不細工な料理の残りをかじりながら、お互いに寝るまでテントで将来の夢を語ったりしました。

翌年以降、海外での訓練は「人道支援」がメインとなりました。軍人学生ながら中近東やアフリカへ向かい、世界遺産を観光しては「炊き出し」、「道路の舗装」、

「治安維持」そして「学校教育」に赴きました。訓練先の国によっては世界各国の軍が集結しているもあり、その時は積極的に国際交流をしながら互いに協力し、状況を安定させる事を学びました。



Peru.

## 「軍隊出動！」と学業

学生部隊まで物々しい状態に変わったのは、9・11 テロからでした。この日を機に学生も国内の各玄関口に配備になったり、首都ロンドンに近い者はロンドンの警備配属になったりと、部隊も増員・変形となりました。私も首都から比較的近くの大学にいたため、ヒース

ロー空港の警備や市内警備に動員となりました。国際スポーツ大会の警備に配属する事も多々あり、担当する場所ではスポーツに触れながらも重装備でテロを未然に防ぎ、怪しい人物がいては尋問しました。人を尋問するのは、一つ間違えれば自分の命取りになります。相手が武器を持っている・いないに関わらず、精神が相当に研ぎ澄まされました。

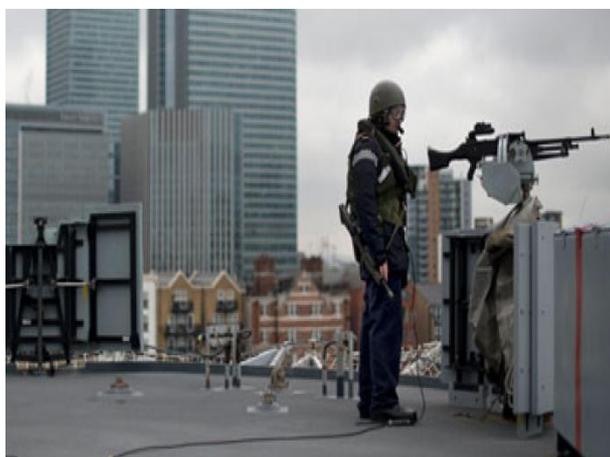
学業は、軍に時間が費やされたのか自分のセンスがなかったのか、低下して大学を中退になり、別の大学に編入をするほどになってしまいました。って、情けないのですが私はその分「お国」に貢献出来たのならよしと、前向きに考えていました。

編入先大学でも訓練でかなり時間を費やし、授業に訓練服(軍服)で行くのが日常でした。服飾科という自分が興味を惹かれた科目でも、課題では常に「軍」の制服や質から離れずに、「最新鋭」を問うファッション界としては「トレンドではない」と落第になりそうな成績だったものです。それだけ、海軍の教訓は強く私の頭を洗脳していました。

### 「365日軍人であれ」

この言葉そのまま、学業よりも何よりも軍人として誇りを持ち生きた日々でした。軍人と言うものは、歴史や国際問題として広く煙たがられる存在ですが、あくまでもその国を守り、国民が安全に暮らせるよう楯となり、海外での人道支援もするものなのです。

24時間365日「軍人であれ」、つまり「プロフェッショナルであれ」という意味合いですが、この言葉は今でも好きな言葉で、何かを成し遂げる際に励みになっている言葉です。



Keeping the eyes on... 2002.